長者ヶ平

むかーし、あったと。
今から千年ぐれー前の話だ。鴻野山の高台に、たいした長者様が住んでおったと。
塩谷民部といって、それはそれは、でっけえ御殿のような家に住んでおってな。大勢の使用人を抱え、たいした暮らしをしておったと。
屋敷の周りには、その使用人たちの家が何軒も建っていて、その向こうの東側には、馬を百頭位もおく馬屋があったり、また南側には、その馬たちを慣らすための、ひろーい馬場もあったと。更には、北側の方に、鍛冶屋まで抱えておって、農具や馬具はもとより、武器までも作らせておったと。広い畑やたんぼもあり、秋になると米や畑の作物が毎日運ばれ、幾棟もある蔵は、いつもいっぺぇだったと。
そんなある日のこと。
都より、源頼義・義家という親子一行が、奥州の安部頼時征伐のため、東山道を北に進む途中、この長者の家に一晩の宿をとったんだと。いやー、この長者は大喜び。力に
「こんな機会めったにねえ、精一杯もてなすようにな」
とはりきり、大勢の使用人たちに言いつけ、それはそれはたいそうなご馳走に、目をみはって喜んだそうだ。
翌朝、出発の時、義家は、
「すまぬが、家来千人分の食料と雨具を用意してくれまいか」
と長者に命じたと。義家はめいじておきながらも
「さぞ驚き、迷惑がるかもしれぬ」
と思っていたようだ。しかし、長者は、
「へぇー、かしこまりやした。お待ちくだせえ」
と言い、さっそく整えちまったんだと。この様子を見た義家は、長者の力に驚きながらも、恐れを抱きつつ奥州へ向かったそうだ。
それから九年の歳月が流れ、奥州征伐を終えた義家たち一行は、都への帰りに再び長者の家へ立ち寄った。長者は前にも増して盛大にもてなし、翌朝、義家たち一行を見送ったと。
ところが、その晩のこと、長者の屋敷が真っ赤に染まったとに。
御殿からも、倉庫からも、使用人の家からも一斉に火の手が上がり、みるみるうちに恐ろしい炎の海となって、一晩のうちに全て灰となってしまったと。
長者のあまりの力に恐れを抱いた義家らが火を放ち、焼き討ちしたんだろうと、今に語り継がれている。
田んぼのまん中には、開墾されずに残っている米塚があり、今もここからは、まっ黒い焼き米が見つかる。

この辺り一帯には、この話にちなんだ地名がいくつも残っていて、今でもさまざまな遺構が確認されています。そのため、平成二十一年に国史跡に指定されました。

おしまい

参考文献　旧南那須町「まちの民話」より